

「神様からの贈り物」

エフェソの信徒への手紙 2:1-10
ヨハネによる福音書 3:16

2023年8月6日
野村 友美 師

<贈り物とは何か>

みなさん、プレゼントは好きですか？

プレゼントするのが好きな方も、されるのが好きな方も、両方好きという方も、いやどっちもちょっと気が重たいという方もいろいろおられるでしょう。プレゼントは、何かと引き換えに渡したり渡されたりするものではありません。

何か良いことをしたから、頑張ったから、役に立ったからという理由付きだったら、それはプレゼントじゃなくて報酬とかご褒美という、別のものになってしまうでしょう。プレゼントは、それを受け取る側には何の理由もありません。

あの人を喜ばせたい、この人の役に立ちたい。

そんな、贈る側からの一方的な理由で差し出されて、渡されるもの。それがプレゼント、贈り物です。

贈る側にだけ理由があって、渡される側には何の理由も根拠もない。だからこそ、贈り物は思いがけない嬉しさに満ちています。一方で、時には贈り物が不安を生むこともあるんじゃないでしょうか。いったいどうして、この人は私にこんな良いものをくれたんだろう？そう思った時に、相手が自分に向けてくれている愛情と優しさを知っていたら、そしてそれを信頼できるんだったら、安心して、ただただ嬉しい気持ちで、その贈

り物を受け取ることができるでしょう。

でも、そうじゃなかったら。その人からの愛情とか優しさを信頼できなかったら、私たちは差し出された贈り物を受け取るのが怖くなると思います。ただより高いものはない、なんてよく言いますよね。知らない人や信頼できない相手から、理由もなく何かをプレゼントされたら、私たちは素直に喜べるでしょうか？これを受け取って、本当に大丈夫かな？引き換えに何か要求されるんじゃないか？そんな疑いがむくむく湧いてきて、せっかくの贈り物を喜ぶどころか怖くなって、どうしたらこの不安を解消できるか気になって仕方なくなるんじゃないかと思います。

そんな時に。私が頑張ったからこの贈り物もらえたんだ、とか私が役に立ったから、あの人はこの贈り物をくれたんだ、とか。贈り物を受け取っても大丈夫そうな、何かふさわしい理由を自分の側にくっつけてしまえば、とりあえず安心です。でも、自分の方に受け取る理由があったとしたら、それはやっぱり贈り物じゃなくて、報酬とかご褒美になってしまいます。そう、私たちが「贈り物」を喜んで受け取るには、まずそこに信頼関係が必要なんです。

<神様からの贈り物>

「事実、あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です。」

今日の聖書の箇所、このエフェソの信徒への手紙を書いたパウロは そう言っています。

「恵みにより、信仰によって」と、今私たちが読

んでいる新共同訳聖書では訳されていますが、元の言葉を直訳すると「恵みによって、信仰を通して」という感じになります。

まず神様からの一方的な愛情と優しさ、つまり恵みによって。そしてその恵みを、「信仰」という神様への信頼を通して受け取って、あなたたちは救われた。あなたたちが救われたのは、神様からの賜物、神様からの贈り物なんだ、とパウロはこの手紙を読む人みんなに向かって宣言しているんです。

あなたたちが頑張ったから、役に立ったから、正しかったから救われたんじゃない。救いは神様からの一方的な恵みのプレゼントだよ、とパウロは今日の短い文章の中でしつこいぐらい繰り返しています。

ここ！ここが大事だからね！と強調しているんです。何回も繰り返して強調しなきゃ、とパウロが思うぐらい「救われるためにはこうするべきだ」とか「これをしない人は救われない」と思っている人たちが多かったのでしょうかね。

多かった、というか、今だって実はけっこう多いのかもしれない。こんな私が本当に救われているのかな、もっと真面目な良いクリスチャンにならないと救われないんじゃないかな、とか。

逆に、自分ではクリスチャンだって言ってるけど、あんな人は本当は救われてないんじゃないの？とか。口に出したり、出さなくても心の中で思ったことはないでしょうか？

「全然、一回もありません」という方がおられたら、その方がすごい人なのか、忘れっぽい人なのかは、私にはわかりません。

私たちはだいたい、納得できる理由がないと安心できないものです。今日の箇所の初めにパウロが言っているように、私たちはみんな

「自分の過ちと罪のために死んでいた者」です。知っていることにもできることにも限界があって、完全には程遠いのに、それでも私たちは自分を、自分の世界の王様にしたがります。

神様の思いに従って窮屈でいるよりも、自分勝手にしていきたい。神様や他の人を大切にすることも、自分の欲求を満たすのが最優先。そんな自己中心の思いを振りかざして、神様のこともお互いのことも、時には自分自身も傷つけてしまう。

それが、私たちをどうしようもなく支配している「罪」です。

良くないとわかっているけど、罪の心地よさには、私たちはどうしたって自力で抵抗しきれません。抵抗するどころか、「これこそ正しいことだ」なんていう理屈をこね上げて、自分にも周りにも認めさせようとさえします。

そのぐらい罪は魅力的で、吸引力ばつぐんで、私たちをいとも簡単に神様とお互いへの愛から引き離してしまうんです。

その際たるものが、戦争という行為でしょう。今日は8月6日です。

ちょうど78年前の今日、広島に原子爆弾が落とされました。戦争がどれほど多くの人の命を踏みじめるか、どれほどの痛みと悲しみを生み出すか、日本だけじゃなくて、世界中の人たちが目の当たりにしたはずです。

なのにまだ、戦争はこの世界のあちこちで続けられています。国同士が、あるいは民族同士が、自

分たちの感情や欲望を正当化するために、それぞれの「正義」を掲げて、相手への思いやりを投げ捨てて、お互いの命と尊厳を踏みにじっています。愛されて愛することを、何よりも幸せで平安だと感じるはずなのに、その愛を見失って、神様を無視して、お互いを大事にできずに傷つけ合ったままで終わってしまう。自業自得といえばそれまでの、そんな私たち人間をそれでも神様は愛して、憐れんで、罪から救い出して生かそうと決めてイエス様を差し出されたんです。それでも、ただ「神様があなたを愛してくださっている」、「あなたは神様から大切に思われてる」なんて言われても、愛される理由を自分の中に見つけれないと私たちはなかなか安心できません。神様の大事な大事な独り子が、私の罪の結果を代わりに引き受けて、十字架の上で痛くて苦しい思いをして殺されたなんて。しかも、その死から復活して、神様の子どもとして生きる永遠の命を私にも差し出してくださってるなんて。そんなものすごいプレゼントを受け取るのに、ふさわしい理由が自分に何もないと思うと、私たちは怖くて不安でたまらなくなります。だから、贈り物じゃなくて報酬とかご褒美にすり替えて安心したくて、「救われるためにはこうしなきゃ」とか「こうしない人は救われない」とか言いたくなってしまうんです。でも、そうじゃない。イエス様が十字架で死なれて復活されたのは、神様からの「贈り物」だ。わたしたちが罪から救われて、神様の子どもとして生きられるのは、ただ神様がわたしたちを愛して、大切に思ってお

られるからだ。そうパウロは突きつけます。私たちが何かの条件を満たしたからじゃない。だから信仰を通して、つまり神様の愛を信じて、神様を信頼して、この贈り物を素直に受け取りなさい！
そうパウロは訴えているのです。

<贈り物を受け取ったから>

このパウロの確信は、根拠のない思い込みではありません。同じ新約聖書のヨハネによる福音書は、かつてイエス様ご自身が語られたこの言葉を今も伝えています。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」 (ヨハネ3:16)

神様から私たちへの、すべての人への贈り物として来られたイエス様本人が、パウロよりもずっと先に宣言しておられるんです。神様はご自分が一方的に犠牲をはらうぐらい、お創りになったすべてのものを愛しておられる。この神様の愛を信頼して、イエス様を神様からの救いの贈り物だと信じて受け取るなら、どんな人でも必ず神様の子どもとして生きられる。神の国の永遠の命には、他のどんな条件もついてなんかいない。このイエス様の宣言をパウロも、他の弟子たちも、その後続く数え切れない信仰者たちもみんな受け継いできました。

今日ここで一緒に聖書の言葉を聞いて、礼拝をささげている私たちも、このイエス様の宣言を受け取っています。

私も、皆さん一人一人も、すべての人が神様から愛されています。

神様から大切に思われて、イエス様という贈り物によって罪から救われて、神様の子どもとして生きる命を差し出されています。

そう、「あなたたちは救われるだろう」という未来の話、パウロは今日の手紙の中でしているのではありません。「救われた」と完了形を使って、彼は言い切っています。

神様からの贈り物で、あなたたちはもう救われた！だから神様の愛を信じて、素直に喜んでこの贈り物を受け取りなさい、一緒に神様の子どもとして生きよう、とパウロは今日もこの手紙から私たちに向かって呼びかけています。

今日の箇所のしめくくりの言葉を、もう一度お読みしましょう。

「なぜなら、わたしたちは神に造られたものであり、しかも、神が前もって準備してくださった善い業のために、キリスト・イエスにおいて造られたからです。わたしたちは、その善い業を行なって歩むのです。」

私たちをお造りになった神様の愛を信じて、神様からの救いの贈り物をそのまま受け取るように、私たちは招かれています。

復活されたイエス様と一緒に、神様の子どもとして、この地上での人生と、神の国での永遠の命を生きるように、私たちは招かれています。

神様と人とを愛して、生きることを心から喜べるように、と今ここにおられる一人一人が招かれています。

私たちの日々の一步一步を通して、出会うすべての人が招かれています。

キリスト教会が毎週日曜日の朝に礼拝しているのは、イエス様の復活を喜び祝うためです。

十字架につけられて死なれたイエス様は、ユダヤ教の安息日が終わった次の日、日曜日の朝に死からよみがえられました。復活されたイエス様の命、私たちに差し出された神の国の命という

「贈り物」を喜び祝って、教会は日曜日の朝に礼拝しているんです。

イエス様の復活をお祝いするこの日曜日の朝、私たちは改めて神様からの贈り物を受け取ろうではありませんか。

私たちは、皆さんは、私たちが出会うすべての人は、神様に愛されてイエス様によって罪から救われています。

このことを信じて、贈り物として受け取って、神様の子どもになるようにと、すべての人が招かれています。他にどんな条件もありません。

私たち一人一人のために、すべての人のために、イエス様は来られました。

お祈りいたしましょう。